

児童養護施設における心理的援助 —統合的アプローチの視点から—

児童養護施設札幌育児園 和田 晃 尚

要 約

本研究は、児童養護施設で生活する子どもへの援助過程を報告し、児童養護施設における心理的援助のあり方を考察したものである。その際、統合的アプローチの視点をもとに、多職種との協働のあり方や心理職の役割について、1) 治療的連携、2) 全体的視野で臨む、3) 個別のかつ多面的な援助、という観点から考察した。児童養護施設において心理的援助を展開する際、職員同士の円滑な協働関係によって施設全体が治療的環境として広がりをもつてくることが重要であり、子どもを取り巻く環境のアセスメントや心理職の立ち位置、施設の要請を考慮しながら全体的推移の中で事象を捉え、援助を具体化することが必要であると指摘した。そして、個別心理療法だけではなく、生活場面に積極的に参加しながら観察と思考を続け、援助の目標を焦点化し、子どもの発達や生活状況を考慮した個別的多面的な援助を行うことが求められるということを論じた。

キーワード：児童養護施設、心理的援助、統合的アプローチ

I. はじめに

近年の児童養護施設には、虐待をはじめ複雑かつ過酷な事情を背負った子どもが多く入所している。中には発達の遅れや情緒的な問題、対人関係不平等、生活上様々な生きにくさを抱えた子も多い。そのため児童養護施設は養育の中に治療的、成長促進的関わりが求められ、子どもの多様な成長のあり方に応えていかなければならなくなっている。

これまで多くの実践報告がなされ、知見が重ねられており、児童養護施設における心理的援助の課題を包括的に論じ、今後の臨床実践を考える上で示唆に富んだ報告もある(加藤, 2003)。だが、具体的な実践については個別心理療法のプロセスを中心に論述されることが多く、また、施設での心理臨床における面接構造の不安定さや、職員数、勤務体制、施設規模等の環境の不十分さを指摘されることも多かったように思われる。しかし、児童養護施設では物的にも人的にも限られた資源の中で養育の実践を積み重ねてきた歴史があり、そ

してそこは生活施設であって、入所している子どもたちにとっては生活空間そのものである。したがって、そうした施設の特徴を十分捉えた上で、そこで展開しようとする心理的援助を考えていくことが本来求められていることであろうし、施設に暮らす子どもたちの生活実態に即しつつ、現実的かつ必要性に応じた心理的援助のあり方を模索することが重要であろう。

ところで、村瀬(2001, 2003)は臨床実践において、“複眼の視野で観察し、多軸的思考でもって、総合的にものごとを捉え、個々のクライアントに応じた援助を創案していく統合的アプローチ”の重要性を提唱している。統合的アプローチは、多岐に分化した理論や技法を学び、自分のものとして吸収していこうと努めつつも、常に目前の現実、目前のクライアントについて、個別に即応して考え、自分の責任のとれる範囲で創意工夫して対応しようとする臨床姿勢を基盤としている。援助者は自分が今置かれている臨床場面に求められていることは何かと考え、何を、どこから、どのよう

に着手すればクライアントが現状より暮らしていきやすくなるかと模索しながら、クライアントの状況に応じて援助の仕方を変容させていくことも求められる。また、自己完結性に固執せず、多職種、多機関との協働を図り、治療的連携、治療的精神風土の醸成に努めることも重んじられる。

全国各施設で試行錯誤の中、様々な実践が行われている現状にある今、村瀬の提唱する統合的アプローチは、児童養護施設における心理臨床に求められる治療的スタンスであり、施設における実践から帰納的に心理的援助を考え、構築していく上で重要な基礎になると思われる。しかし、こうした視点に基づいた実践報告は私見の限り少ない。そこで本論では、統合的アプローチの視点に基づき、筆者(以下、Thと略記)が児童養護施設において、およそ3年間にわたり関わった1人の入所児童に対する援助過程を振り返り、児童養護施設における心理的援助のあり方を考察した。

II. 事例概要

プライバシー保護のため、個人を特定する情報については省略及び変更を加えている。

対象児童：A，男児，4歳（X年援助開始時）

1) 入所経緯：

X-2年、実母の養育拒否により里親に委託されたが、Aの様々な問題行動、喘息発作、夜泣きなどが頻発し、里親変更。しかし、次の里親宅でも里母が心労で倒れ措置変更となり、X-1年に児童養護施設(以下、施設と略記)に入所となる。実母のAへの愛着は希薄。実母は未婚で認知も受けておらず、Aの実父は不明である。Aについて、児童票に入所時の医診で精神発達遅滞疑いと指摘されており、吃音、アトピー性皮膚炎、喘息、アレルギー体質と特記されていた。

2) 施設について

大舎制の施設で、直接処遇職員(以下、職員と略記)が担当居室(4~6名の児童を担当)を持ち、入所児童のケアにあたっている。Aをはじめ幼児児童(6歳以下の子ども)は、学童児童とは廊下続きの別の棟で生活している。

3) 心理職の位置づけ

Thは施設が初めて採用した常勤の心理療法担

当職員であり、そのため、心理職の役割は確立されておらず、担当居室をもたないという点以外は、概ね他の職員と同様の業務を行っていた。個別心理療法は1回60分、不定期に、廊下続きの扉一枚隔てた別棟にある一室を利用して行われた。

III. 援助過程

便宜上3期に分けて記述しているが、個別心理療法の展開を中心において記述するのではなく、生活場面でのAの様子やThとAとの関わり、その時々に関わり方の工夫等々を複合的に記述することを心がけた。文章内「」はAの発言、〈〉はThの発言を示す。

第I期 X年4月~X+1年4月

入所当初よりAとのかかわりで職員は四苦八苦しており、玩具を独占できなかったり、要求が受け入れられないと、憤怒、号泣しながら部屋を飛び出していく毎日であった。飛び出していった先では、壁を蹴ったり、窓を叩いたりして、職員の気を引くように泣き続けることも多かったが、Aの担当職員(以下、B先生)はAに献身的に関わっていた。Aの第一印象は、小柄で素朴な表情をした男の子で、容易に他者を寄せつけまいとした言動に表れる荒々しさの反面、とても繊細で敏感な感受性をもっているとの印象を受けた。

この頃、B先生の“Aをまるごと受け止める中で少しでも関係を深め、穏やかに気持ちを伝え合えるようになりたい”という意向を汲み、この方針を担当職員間で共有することとした。そこでThは、まずは日常生活での遊びの中で時間を共にしようと考えた。当初、AはThをまったく寄せ付けず、「あっちに行って!」と怒鳴るように拒否することが多かった。その一方で、距離を置き遠目でAを窺いながら他児と遊んでいるThに対して出し抜きに「やってってば!」と、ままとの相手を求めたり、玩具の使い方を教えてと強く要求をしてくることもあった。Aを含め子どもたちとパズルで遊んでいた時の事、パズルをうまく進めることができず、「いやーやってってば」と、足をばたつかせて泣くことがあった。〈頑張ってやってごらん〉と励ますも、ますます「やだ!もういい」と反発するので、Aが出来そうなところ

までパズルを進め、〈ほら、後少しやってごらん〉とわたす。すると、気を良くしたのか、パズルに取り組み始め、完成させると「自分で出来た！」と大喜びする。Aとの関わりではそうしたAが抱える様々なうまくいかなさにアンテナを張って、Aの受け入れられる範囲を感受する毎日であった。

この頃のAの見立てとして、言葉の遅れ、吃音、アトピー性皮膚炎、喘息、食物アレルギーなど、気質的、発達の要因と、実母からの養育拒否、2回の里親交代という人との繋がりを諦めざるを得ない傷つきの体験が背景にあって、自分の思いが滞り、伝わらないという思いになりやすく、怒りや寂しさを日常的に感じているのではないか。信頼できる人との間で、そうした感情を少しずつ表現しながら取めていく中で、日々の体験の連続性や、人との関係において“つながる”という感覚が育まれることが必要なのではとThは考えていた。そのため、Aと個別の時間をもちたいとThは考えていたが、現実的にAとB先生は関係形成のさなかであったので、まずはB先生の援助目標をサポートするために、後方支援に回る方針とした。具体的には、B先生がAに手を取られることで、B先生の他の担当児童が不安定になる際、その子どもたちを引き受けたり、B先生が別の子どもに手がかった際に、Aと一緒に中庭に行き、昆虫採集や砂遊びなどをして時間を過ごした。

勤務シフトの都合上、いつもB先生がAに対応できるわけではなかったので、痙攣を起こし、泣きながら部屋を飛び出すAを、Thが追いかけてなだめる機会も増え、その中で次第にThへの拒否的な態度は和らぎ、抱っこを求めてくるようになる。そうした際は、静かな場所に移り、窓の外から見える景色や部屋のカレンダーに描かれた動物の絵を「あれ！あれ！」と怒鳴るように指差すAに、〈これはお花で、これは……〉と1つ1つ応じ、Aが落ち着いていくのを待つという、穏やかな時間を共にした。AのThへの抵抗感が和らいだ頃、添い寝の際に痒くなった体をさするよう求めたり、Thの腕時計を気に入り、それを自分のベッドに隠したいと求めることがあった。また、Thの服のポケットに大切な玩具を預けることもあった。そうした何気ないAの仕草から、つなが

りたい、委ねたいというAの気持ちが伝わってくることがあった。

Aとかかわり半年が過ぎた頃、相変わらず他児との喧嘩は絶えなかったが、少しずつ「ごめんね」と言う姿も目にするようになる。印象的だったのは、トイレにてThが用便を済ませたAのお尻を拭いた際「ありがとう」と言われたこと。この時期、Aに様々な変化がみとめられ、吃音がなくなり、ゆっくり考え、確かめるように話すようになる。

第Ⅱ期 X+1年5月～X+2年2月（#1～#9）

幼稚園に入園し、生活の流れが大きく変化する。さらに、人事異動によりAの担当者が変わることとなり、その心の揺れは施設、幼稚園問わず集団不適応という形で現れていた。感情は怒りという形でしか表現されず、攻撃的で、職員が介入しても、Aの気持ちは言葉にならず、ただただ泣き続けることが多かった。この時期のX+1年5月より、個別心理療法を開始する。

日常的に職員には不従順で、特に遊んだ後の片付けの際に、他児が片付けていくのを尻目に、一向に片付けようとせず遊びまわっているAの姿が職員目に付くようになり、注意されることが日常茶飯事であった。ThはAと職員との関係に悪循環が生じているのを感じ、この頃始めた個別心理療法の一方で、これまでのAの変化について会議や職員との日常会話の中で話題にしたり、職員らがAに求めた“片付け”をAが遂行できるよう、環境調整を目指した。例えば、玩具の数が多すぎることや、誰が何を片付けるのかが不明確であること、また、玩具が雑多になりごちゃ混ぜで箱にほうりこまれること等々、これらが複合的に絡んで問題が生じていると考えられたので、玩具の整理や種類の分別をし、片付けの際にThがその場につくなど工夫した。また、共有のものを使用しなければならぬという中、少しでも自分だけの所有物という感覚が育まれればと、Aがそのとき欲していた飛行機や、クワガタなどを折り紙で作ってあげたりもした。すると、Aはそれらを自分のおもちゃ箱に大切にしまい、度々「先生ほら、

まだ大事に持ってるよ」と誇らしげに話してくれることが増え、物を大切にしようという自発的な行動も芽生えてきた。

さらに、A個人の問題だけではなく、大勢の児童が入所し、そうした雑踏の中でストレスが充満し子どもの緊張を高める環境的要因も感じていた。そこで、喧嘩が絶えずそのことが指導の対象にもなっていたAの仲間関係形成の援助も兼ね、人気のあったブロックを素材としてAをはじめ同年齢集団をメンバーとしたグループワークを展開した。独占欲が強く、気に食わないことがあると「もういやだ！いいもん遊ばないから」と、廊下に出て行ったり、玩具を投げつけたりすることが続いたが、その都度、〈みんな同じ約束で遊んでいるんだよ。また一緒に遊ぼう？〉と誘い、仲間の輪に戻ることを支え、その繰り返して、少しずつ集団内で遊べるようになっていった。そうした援助の展開と並行し、新しい担当職員（以下、C先生）とAの関係をサポートするため、Aの見立てや今後の方針についてコンサルテーションを重ねた。

個別心理療法では普段見せるAの様子とはうって変わり物静か。遊びが定まらず、どうしていいかわからない様子もしばしば。「みんなに取られちゃうから」と、ままごと用ハウスにおもちゃを隠し、秘密基地のようにして遊ぶのが印象的で、そうしたAの姿に、以前ThのポケットにAの大切な玩具を預けるという生活場面でのエピソードが重なり、誰にも脅かされず、秘密にでき、大切なものを失わないよう護るということがAにとって切実なことなのだと改めて痛感する。しかし、遊びが定まらず、終了時間となり途中で終わってしまうと、次の回はまた最初からということが繰り返えされ、さらに個別心理療法の時間を定期的に十分もてないという状況の中、こうした面接を続けていてAのためになるだろうか、何か工夫できることはないかと悩む毎日が過ぎる。

第Ⅲ期 X+2年3月～X+3年3月（#10～#32）

日常生活で見せるAの雰囲気は朗らかになり、日課もスムーズにこなすなど、全体的に落ち着き

が見られてきたが、言葉での意思疎通が苦手で、思いをうまく伝えられないことが多く、イライラして怒鳴ってしまうことがAの課題であった。この頃、Aの能力特性をしっかりと把握し、改めて日常的な関わりの配慮を考えようとC先生と話し合い、知能検査（WPPSI）を実施。結果から、目標達成までのスピードや、物事を理解したり、情報処理が遅いものの、1つ1つの課題への取り組みは正確であることがわかり、物事への取り組みや会話におけるAなりの間を大切にしようという方針をC先生と立てた。

一方、個別心理療法では箱庭を中心にAの内面が表現されていき、自分を少しずつ出していくようになる。特大サイズの恐竜2匹と、ダンプカーやショベルカー等“働く乗り物”のミニカーが主とした登場アイテムで、時には恐竜同士の戦いが行われ、そのダイナミックな表現にAの混沌とした感情や葛藤が表現された。

面接を重ねる中、「お部屋に本当の水あったら？」と言い、これまで箱庭で中心的な役割を担ってきた「首長恐竜」に水を飲ませたいと話す。面接室に水を使用できる設備は無かったが、とても意味のあることのように感じられThは〈これに入れて飲ませるなら〉と、空のプラスチックケースを容器に見立てて水を汲んでくると、Aは恐竜に水を飲ませ「飲んだ！」と満面の笑みを浮かべる。実にうれしそうなAの表情が印象的で、この回以降、水入りの容器を欠かさず用意することにした（#14）。次の回、いつもはすぐに遊び始めるAであったが、この日は様子が違っていた。それまで面接室を照らしていた木漏れ日が緩み、Aの喘息特有の息づかいがよく聞き取れる程、部屋は静まり、対照的に外ではセミの鳴き声が響き渡っていた。Aは神妙な面持ちで、セミの音に耳を澄まし、ほとんどの時間を窓の外の景色を眺めながら過ごしていた。ふと、「先生、あのセミ、お父さんとお母さんを探してるんじゃない？」と言うので、〈お父さんとお母さん探してるのかあ……ちゃんと見つけられるかなあ〉と応えると、「うん。きっとあっちの葉っぱが多いところにいると思うよ」。その言葉から、名状しがたいAの心境が伝わり、〈そっかあ、先生もきっと見つけ

られると思う〉と希望を言葉に託すのが精一杯であった(#15)。

これまで面接過程において、ブロックで作った玩具等を部屋に飾っておいて欲しいと求めることが多かったが、その都度面接の原則を伝えてきた。しかし、「とっておいたら?」と続けるAに、“つながり”というAにとって大事な感情体験が起こる契機をこれまで見出せなかったのを思い、何かいい方法はないかと考えた末にA専用収納箱を用意して、〈写真に撮っていつでも見れるようにこの箱に入れることならできよ。そうする?〉と提案すると、「うん、いいね」と納得した様子だったので、作品を写真に収め、一枚一枚収納していくこととした(#17)。

箱庭による内的表現が手伝ってか、Aの言葉にかすかな変化が見られた。#24の箱庭制作(この日Thも共同参加)で、「鳥恐竜飛んでるところにしたいんだけど……長い紐とかない?そういうのだめだよ……」と、これまでAの独特の表現であった「～だったら?」という表現が「～したい」と、初めてAが自ら思いを発信する主体者として表現されたのである。〈飛ばしてみるかい?〉とThは部屋にあった毛糸で、プラノドンのミニチュアを天井から吊るす。すると、「そうそう!こんな感じ!」と飛び跳ねて喜んだ。面接室からの帰り際「こういうのがずっとしたかったんだあ」と充実した面持ちで語った。#29、収納箱を開けて写真を確認する様子は、これまでを振り返るかのようであった。「水は?」といつもの容器を取り出して、ミニチュアのトカゲを手にとると、「これ本物だったらいいのに」と言いながら水の中に入れていく。その様子を見て「生きてるみたい」としんみりと話すAの表情はにこやかでありながら、神秘的な雰囲気感を湛えていた。最後の面接では粘土で焼きそばとケーキをThに作ってくれる。丁寧に細部にわたってこだわりながら作っている姿を見て、Aにおもてなしを受けたようで感慨深かった。

IV. 考 察

1. 援助過程に見るAの変容について

人生早期に世界とのつながりや、人への信頼に

対する傷つきの体験を余儀なくされたAは、怒りや悲しみの入り乱れた感情が未だ言葉以前のものとして混沌としており、不安定な対象関係による生きにくさを抱えていた。そのため、穏やかな経過を辿りながら、情動が受けとめられ、気持ちが整理でき、人とのつながり、絆を感じとれる時間と空間をAに提供していくことが重要であると考え、面接室、生活場面問わず“つながる”ということが1つのテーマとなって援助が展開されることに留意していた。

援助開始当初は、すぐにでも個別心理療法の時間をとを考えていたが、B先生の個別援助計画の方針を勧告して、個別心理療法の場でAの内面に触れていくよりも、現実生じているB先生とAとの関係形成を支持することの方が、Aにとって大切な体験となり得るであろうと考え、後方支援に回ることにした。この局面では、職員状況、施設の要請、Thの役割の不明確さ等の条件から、個別心理療法に固執することは必ずしも適切ではないだろうと考えたからである。そのためAとの関わりは生活場面を中心に進められた。その際は、つかず離れずの距離に居て、Aが何か求めるときにそっと対応していくことを心がけつつも、Aの受け入れられる範囲、出来ることから少しずつ関わりを広げていった。そして、Aとの距離が段々と縮まった頃、具体的に生じているAの人間関係にアプローチすることも心がけた。例えば、遊びの場面でAの自我統制や対人スキルが育まれ、その中で他者とのつながりが感じられる契機となるよう、仲間集団に人気のあったブロック遊びを設定したり、規範性が求められる場でのAと職員との緊張関係において、遊んだものを片付けることを具体的目標に立て、現実場面にAの自主性が育まれ、適応的な行動が増加すれば、周囲との間に徐々に朗らかな関係が生まれるのではと考え、積極的な関与も講じた。

第Ⅱ期に入り、個別心理療法を開始し、その過程で少しずつ安心感、守られる実感をえたのであろう、徐々にAの感情表現が動き始め、第Ⅲ期では、箱庭で2体の恐竜がAの混沌とした感情を表現していくための大きな役割を担っていた。そうした個別面接の過程でAがセミの音に触発され、

セミへの思いを語った回があったが、その語りは、これまでの自分の生い立ち、家族について、自分の行く末はどうなるのかというAの名状しがたい思いを、セミの親子という自然の生命に仮託して表現しているかのようであった。その次の回の面接で、Aの内的表現の役割を担ってきた一体の恐竜は、水を欲し、そこからエネルギーを得ることになる。Thはどうしても水を飲ませたいというAの姿から、そこに意味を感じ、毎回水を入れた容器を用意することにした。当初、その意味はThの中で漠然としたものであり、明確に言語化されるには至っていなかったが、この水はミニチュアの動物に生命を宿す役割を担い、「生きてみたい」とAが生命を実感することにもつながるものであったことを、その後理解することになる。Aは次第に生き生きとし、プテラノドンを空から吊るすことで、地上の恐竜らを眺望するシーンを表現した姿からは、溢れるエネルギーをコントロールし自分のものとしていく主体性と力強さが感じられた。

個別心理療法では不安定な面接構造が続き、次の面接の約束もなかなかできないという不本意な現状の中、それでも面接室での時間はつながっている、途切れるものではないということを実感してもらうために、「とっておいたら」と繰り返すAとの関わりを契機として、面接室にはA専用の箱を用意した。時折箱を確認し、振り返るようにして写真を並べては、安心したように眺めていたこともあり、A専用の箱に写真が収められていくなかでつながりを実感として体験することにつながったのではないと思われる。Aの心の変化は面接室での時間だけではなく、生活場面でも垣間見ることが出来た。例えば、「ほらまだ大事に持ってるよ」とのThの作った物に応じた言葉など、さりげない日常の会話の中でも、自分と他者のつながりを確かめるような言葉が生まれていた。

排泄場面において生じたAの「ありがとう」という言葉や、セミの鳴き声に触発された語りなどに触れ、Aのそうした心の動きは個別心理療法の時間に限定されるのではなく、生活全体の中での様々な事柄と不可分に絡み合いながら、現実生活における具体的な出来事、人とのかかわり、自然

とのふれあい等々の中で結晶化されていくものなのではと実感されることであった。Thとの関係で体験した、人との関係で委ねることもよしとするあり方は、人と分かち合いたいという気持ちを芽吹かせ、生活場面での仲間関係に穏やかさが生まれ、関係が円滑になることにもつながっていったのではないと思われる。

生活場面、個別心理療法と区分けすると、それぞれで特異なことが展開しているように思われるが、決してそうではないだろう。また、本事例のように、十分な個別心理療法の時間が取れない状況にあっても、現実状況から治療的に意味のある時間を見出そうと、少しでも生活場面で具体的なアイデアを創案し、工夫した関わり方を為すことで、援助を進展させることは可能であり、そこに一貫した方針に基づく関わりが為されるならば、生活場面と個別心理療法が自然に連動していくことが可能ではないと思われる。そうした営みに施設における心理的援助の独自性や可能性が見出せるのではないだろうか。

2. 施設臨床における統合的アプローチ

本事例でThは、十分な個別心理療法の時間が取れない状況の中、「つながる」ということが1つのテーマとなって、面接室、生活場面問わず援助が展開されるようにとの方針を一貫して抱えていた。このことの背景には、環境の条件や施設の要請、Thの役回りを考えて援助を展開することが求められ、また、生活場面で援助を具体化する工夫が必要とされる条件下にあったことにもよるが、先述したように、むしろそうした援助のあり方に施設における心理的援助の独自性や可能性が見出せると考えられる。そこで、Aへの心理的援助の展開を支えていた要因について、以下に統合的アプローチに基づき、1) 治療的連携、2) 全体的視野で臨む、3) 個別的かつ多面的な援助、という観点から整理してみたい。

1) 治療的連携

施設における実践では、入所している子どもたちへ居心地が良く安心できる時間や空間、安定した生活体験を保障していくことが重要であり、生

活臨的なアプローチが求められる（村瀬ほか、2002）。このことを考えると、日常業務において心理職とケアワーカーとの仕事が重複する部分があっても自然なことであろう。心理的援助を始める際、対象となっている子どもの担当職員が援助目標としていることを尊重しつつ方向性を決め、連携して援助を進めていくことも大切であり、必ずしも明確に特化された役割分担に固執する必要はないのではと思われる。

心理職が他の職員と協働していく際、援助方針や見立てが周囲と共有できる言語で表現されていることはもちろんのこと、子どもが抱える課題を、実際に生じている具体的エピソードをもとにして他の職員に伝えることができ、心理療法の必要性や、その影響によって起こり得る変化、生活の中で配慮してほしい事柄などを伝えられることが求められる。また、必要に応じて他の職員も援助の共同者として参与できる現実的な援助を考案することも必要であろう。本事例のAとB先生の関係構築の際に後方支援にまわったように、時には職員が自分の担当の子どもとの時間を過ごせるように、Thが別の業務を引き受けるあり方が必要な局面もあろう。そうした円滑な協働関係、疎通性豊かな関係によって施設全体が治療的環境として広がりをもってくるということが重要ではなかろうか。特にケアワークを兼務している心理職の場合、個別心理療法は日課の合間に行われるため、一日の職員の勤務状況や業務全体からとらえれば、自ずと他の職員のサポートが生じていることがわかる。個別の心理療法が他の職員にも支えられているのであり、こうした自覚も大切であろう。

2) 全体的視野で臨む

四方・増沢（2001）は、“早期発達上の課題を抱え、しかも発達途上にある被虐待児に対しては、狭義の心理療法の技法では足りず、子どもの現実生活の営みを的確に見据えた上で援助内容を工夫する柔軟性が求められ、生活場面での関与しながらの観察が重要な意味をもつ”と指摘している。これは情緒障害児短期治療施設の心理治療について述べられたものであるが、児童養護施設においても同様のことが言える。

本事例の第I期において、AがThの時計を気

に入り、それを自分のベッドに隠したいと求めたことや、Thのポケットに大切な玩具を預けるといったAのしぐさが、Aの理解を深める契機となったように、心理職は日課、行事等の生活場面に積極的に参加し、援助を展開しながら、対象の子どもの理解を深めることが子どもを全体的に理解するために求められてくる。生活施設では子どもへの個別的な心理療法と同等、もしくはそれ以上に子どもの理解について絶えず他の職員に伝えられるよう、アセスメントが心理職の大きな役割であることが指摘されている（内海、2013）。個人についてのアセスメントだけではなく他の職員との協働の中で生活を見る視点を持ちながら、幼稚園・学校生活、子どもの家族状況はもとより施設の入所児童や職員の状況、子どもと職員の関係など、子どもを取り巻く環境のアセスメントや、全体的推移の中で事象を捉えていくエコロジカルな視点が求められ、現場はこうした点を踏まえた包括的な助言を求めている。

また、施設で暮らす子どもたちの中には、自らの内面を語るにはあまりにも過酷な生い立ちを背負った子どももおり、Aもその一人であったが、そうした子どもたちに対しては、受容的な人間関係を十分経験する中で、自我が生まれ、ゆっくりとその子のペースで内面が語られ、こころに収めていけるような、細やかな配慮が生活のあちこちで必要となってくる。子どもがこころを開き、伝えたいとする機運が生じ、生活の中での何気ない場面で、言語的にも非言語的にも内面が表現されることはまれではない。施設で働く心理士はそうした瞬間を、これまでの援助の展開から考えつつ、治療的転機としての確にとらえて応えていく、そこに専門性が求められてくる（村瀬、2008）。

本事例でAの成長は、Thとの関係に限定せず、担当職員との関係性、普段の仲間関係、個別心理療法の時間など、それらが複合的かつどれかが極端に重みをもって生活に突出せずに、自然な形で同時進行していたことに支えられていたのではないかとと思われる。セミに仮託してAが自らの根源的なものに触れ、思いを語ったことは、個別心理療法の文脈だけでは説明しきれないことのように思われる。個別心理療法の枠で守られ、内的世界

が表現されることで、その子のエネルギーが賦活され、感情が生き生きと蘇る。そうした歩みと並行して、日常生活の連続性の中で、人と共に在ることの安心感、仲間や職員とのつながり等々、これらが輻輳して育まれていくことで、今の自分という存在がクリアになり、過去から現在という時間軸がAの中に生じてきたように思われる。そうした内的な成長が、セミに仮託してAが自らの根源的なものに触れる時を醸成したのであろう。

3) 個別のかつ多面的な援助

施設で暮らす子どもたちは現実生活における人との関係や出来事で困惑し、思い悩んでいる。そうした折に共に在り、こころに触れ、今よりは少しでも良い方向にとアイデアを出し、共に取り組んでいく、そうした在り方は心理職にも求められることではないだろうか。入所児童と生活を共にするということは養育を担うということであり、その子の成長発達に即して関わるが必要不可欠なこととして生じてくる。そこでは、養育的関わりの中に発達心理学的視点や行動療法の原則を加味しながらアプローチしていくことも有用であらう。

生活で見せる子どもの姿からその背景に潜む本質的な課題を見出し、それを汲み取りながら対応していくことも重要となる。例えば、Aがおもちゃを片付けられないということの背景として、大人への不信感の根深さからそこで展開される対人関係に不和が生じやすく、職員の話聞き入れるところまでに至らないのかもしれないし、あるいは、集団生活という環境にあって、緊張しやすく、そのことが注意散漫、多動傾向を生じさせているがゆえに、目的行動に及ばないということも考えられる。子どもが示す1つの言動をとっても、その背景について様々に思い巡らせながら、援助の目標を焦点化し、援助を展開することが必要である。近年、施設に入所してくる子どもたちが抱える問題は複雑多岐にわたっており、単一の理論や技法では対応しきれず、ジェネラリストとしての臨床実践が求められる。

3. 施設における心理的援助

以上を総括すると、児童養護施設における心理

的援助とは、養育の中で具体化されるという側面を持っていると言える。ゆえに、その子の発達の程度や生活状況を考慮した上で、必要性、必然性のともなった現実的な援助こそ優先されるべきである。“クライアントの生活の質をしっかりとらえながら、必然的なこととして個別面接ないし心理療法が行われることが基本”(青木・村瀬, 2004)という指摘は、施設における心理的援助の際にことさらに重要な原則と言えるのではないだろうか。

もちろん重篤な心理的問題を抱える子どもたちの中には、個別心理療法の枠組みの中で、守られ、ゆっくりと心理的課題を乗り越えられるよう支援することが必要な子もいる。しかし一方で、生活場面の日々の営為に治療的な働きをもたらすような細やかな創意工夫を施し、そうした環境作りの中で成長を育むことも必要となろう。加藤(2012)が“施設臨床はコミュニティアプローチ型の心理臨床活動と捉えられる”と指摘しているように、生活の場でニーズを発掘し、入所児童と入所児童を支えるキーパーソンに対して働きかけるよう、外来型の個別心理療法から一歩踏み出した心理職としての在り方も問われてくるのである。

心理職が施設で生活する子どもたちと時間を共有しているがゆえに起こる問題は少なからずあるが、施設全体がそれすら含みつつ抱える環境となっていることが大切であろう。そのような環境作りは、施設の風土、方針、職員同士の関係性などを考慮しながら支援を展開するコーディネートの力が求められ、それをいかに具体化し体系化していくかが今後の大きな課題である。

V. おわりに

本論では、統合的アプローチの視点から援助過程を捉え直すことを試みた。近年、児童養護施設に入所してくる児童の多くが、虐待等不適切な養育環境にさらされながら生き抜いてきたことで、様々な発達上の課題を抱えている。そのため児童養護施設におけるケアワークは衣食住の保障だけではなく、養育の中に治療的、成長促進的関わりを織り成すことが不可欠となっている。しかし、生活施設という極めて日常性の高い営みの中で展

開される援助については、その可視化が非常に難しいということ、また、養育の中に治療的要素を見出そうとする以上、生活場面に直接関与しながらの実践的研究を行うことを避けては通れないという大きな課題から、依然として十分な研究が行われていないのが現状である。この点で、統合的アプローチは児童養護施設における臨床実践の積み重ねから帰納的に理論化していくための臨床研究について1つの指針となると思われる。

一方、再現性や効果検証等、科学的研究としての課題は多く、また、全国に580を超える施設が存在し、施設の規模や環境風土、独自の文化、方針、また心理職の採用や位置づけのあり方等々は、施設によって様々であり、各々が個別の臨床現場と言えるため、本論で述べたことを児童養護施設について直ちに一般化することは妥当ではないだろう。しかし、児童養護施設における心理臨床を理論化していくことが、今後さらに社会的要請として求められるのは必至であり、実践を重ねつつ、その具体的諸相を描き、実態に即して紡ぎだされた報告を積み重ねることによって、児童養護施設におけるケアを充実させていくことに邁進しなければならないだろう。

付 記

本論文の作成にあたりご助言ご指導を賜りました北翔大学大学院客員教授村瀬嘉代子先生に感謝申し上げます。また、実践に際し多くのご指導ご協力いただいた施設職員の皆様、そして成長の歩みを共にしてくれたA君に感謝申し上げます。

文 献

- 青木省三・村瀬嘉代子（2004）：心理療法とは何か—生きられた時間を求めて— 金剛出版。
- 加藤尚子（2003）：児童養護施設における心理的援助に関する一考察 日本社会事業大学研究紀要, 50, 151-173.
- 加藤尚子（2012）：施設心理士という仕事—児童養護施設と児童虐待への心理的アプローチ— ミネルヴァ書房。
- 村瀬嘉代子（2001）：子どもと家族への統合的心理療法 金剛出版。

村瀬嘉代子監修、高橋利一編（2002）：子どもの福祉とこころ—児童養護施設における心理援助— 新曜社。

村瀬嘉代子（2003）：統合的心理療法の考え方 金剛出版。

村瀬嘉代子（2008）：心理療法と生活事象—クライアントを支えるということ— 金剛出版。

四方耀子・増沢 高（2001）：育ち直りを援助する—情緒障害児短期治療施設でのチームワークによる援助— 臨床心理学, 1(6), 751-756.

内海新祐（2013）：児童養護施設の心理臨床—「虐待」のその後を生きる（こころの科学叢書）— 金剛出版。

Abstract

Psychological Support at a Children's Home. — Individualized and Multifaceted Approach. —

Akihisa Wada (Children's home Sapporoikujien)

The process of supporting a child living at a children's home is reported and the ideal method of providing psychological support at such institutions is investigated. In individualized and multifaceted approach, cooperation between various professionals and the role of the psychotherapist was examined from the following perspectives : (1) therapeutic cooperation, (2) global vision, and (3) individualized and diversified support. The results indicated that cooperation between staff members was important for making the entire environment of the institution, therapeutic. Moreover, general understanding, giving concrete support, assessing the environment of children, the position of the psychotherapist, and demands of the institution were also significant variables. Not only individual psychotherapy, but also individualized and diversified support that takes the development and circumstances of the child into consideration is required, through continuous participation and observation of actual daily life of the child, making the aim of the support clear.

Keyword : children's home, psychological support, individualized and multifaceted approach